

ご存じですか？ TIFAの機関紙とニュースレターの違い

今回発行された機関紙は Vol.45 です。第 1 号は国際交流協会発足から 3 年目の 1991 年でした。TIFA の文字デザインは画家の故聰濤謙治先生の作品として受け継がれています。表紙を飾った写真は 60 名を超える市立宝梅中学校プラスバンド部員の姉妹都市オーガスタでの演奏風景です。

機関紙の編集は会員連帯のメディアであり、報告や記録だけでなく、常に協会の活動が時代の変化やニーズをキャッチし、会員と共に市民にとってメリットや共感を得られているかを模索しながら積み重ねられてきました。国際交流協会の存立の意義と目的を大切に発行を重ねたいと思います。

ニュースレターは TIFA の事業予告と報告を掲載して毎月 15 日に発行されます。年間 12 回の発行により、2016 年 7 月には 100 号を記念しました。ニュースレターの編集は事務局職員により長年に亘り継続されてきましたが、2016 年度から会員も編集に加わり、新しいアイディアや斬新なレイアウトで刷新されています。

機関紙とニュースレターとは、目的や経緯には違いがありますが、共に国際理解、国際交流の意義を伝えたいと活動する会員のボランティアによって支えられています。

これからもこれらの冊子の編集作業にかかわってくださる方々と、会員の皆様のご投稿をお待ちしております。（KK）



TIFA 機関紙 VOL45 2017.3.15 発行

Takarazuka International Friendship Association

編集：宝塚市国際交流協会 広報委員会

宝塚市国際交流協会（TIFA）は 1988 年に発足し来年、節目の年を迎えます
TIFA の存在が、時代や会員の要請に適合しているか、どうか
委員会の各事業が会員にメリットを与えているか、どうか
さらには TIFA が市民に評価されているか、どうか、問われる年になるでしょう



絵で結ぶ宝塚とアジア



TIFA

インフォメーション

事業のご案内

- ◎ 国際交流や国際理解に関する講演会、セミナー、サマーコンサート、英語サロンなどの開催
- ◎ 外国人来訪者向けのホームステイやホームビジットのシステムづくりと受け入れ Fax : 0797-76-5918 URL : <http://www.jttk.zaq.ne.jp/tifa/>
- ◎ 日本語の支援、翻訳、通訳などの活動
- ◎ TIFA グッズの作成と販売
- ◎ 外国人が住みやすい街づくり支援の生活相談
- ◎ 外国語教室、料理教室、スピーチコンテストの開催
- ◎ 每月発行のニュースレターや HP の監修
- ◎ TIFA 機関紙の発行、TIFA 募集チラシの作成

一編集後記

今回もご講演いただいた田邊先生のお話や、多文化、多言語の環境下で生活している方々の原稿を拝見するにつけ、いかに自分が狭い世界で生活をしていることか、と痛感しますが、こういう感覚が得られるのも役得ですね。この役得も毎回実感します。（JT）

宝塚 23 万市民に、僅か千冊足らずの機関紙発行でも 30 年近く続いていると少しは存在を知って頂けたのかと自問自答している。外国人に日本の文字を読み取って頂くのが壁ではないのか？ 紙を媒体にしていかにして行事を知って頂けばいいのか、いつも悩みの種である。（KF）

募集しています

- ◎ 会員を募集しています。どなたでも加入できます。
年会費 個人 2,000 円 入会金不要
- ◎ 外国からのお客様を受け入れていただくためのホストファミリーを募集しています。
- ◎ ニュースレターや機関紙への皆様のご投稿をお待ちしております。ホームステイや海外での体験、身近な国際交流にまつわる出来事など、どんどんお寄せ下さい。

★ 編集委員 ★

石原美生子 内池滋
奥田啓子 加藤啓子
杉本和子 辻 敦子
寺本さなえ 徳田潤
福家清美 森脇洋子
山本敬子 和田芳明



発行者

宝塚市立国際・文化センター指定管理者
特定非営利活動法人

宝塚市国際交流協会 (TIFA)

〒665-0011 兵庫県宝塚市南口 2 丁目 14 番 1-3 号 宝塚市立国際・文化センター内
Tel : 0797-76-5917 Fax : 0797-76-5918 URL : <http://www.jttk.zaq.ne.jp/tifa/>
～無断転載を禁じます～

目
次

国際理解セミナー 田邊隆一先生「世界秩序の崩壊と日本の対応」	… 2
変わりゆく欧州 現場からの報告	… 4
ドイツ人が語る難民と移民の問題	… 7
多言語教育 外国にルーツを持つ子供たちの報告	… 8
多言語教育 親たちの報告	… 12
母は戦前帰国子女	… 15
TIFA インフォメーション	… 16



「世界秩序の崩壊と日本の対応 ～ヨーロッパの状況を踏まえて～」

12月10日(土)に元外交官の田邊隆一先生(現関西日韓協会会长)を講師に迎え、TIFA 国際理解セミナーが開催されました。

今回、田邊先生に講義頂くのは昨年に引き続き2回目。本年生じた英国のEU離脱問題やアメリカ合衆国の大統領選挙結果など激変する世界情勢を踏まえ、不安定化する世界秩序の崩壊の現状と、それに対し日本の取るべき対策、将来の予測などについて、冷戦後の歴史的経緯を交えて、経済、文化など様々な角度から分かり易く解説して頂きました。講演は約90分、講演の後の質疑応答も活発に行われ、80人を超える参加者全員が十分理解出来、満足な様子でした。講演後もTIFAの理事、事務局、広報委員と先生を囲んで和やかな懇親会が開かれ、さらに活発な意見交換を行いました。誠に有意義な講演をして頂き、先生には深く感謝し、お礼申し上げます。(YW)

【講演要旨】

現在の世界の大きな動きとその流れをみて、日本はどうすればよいかという事が前提のお話です。先ず、1900年以降の20年毎の世界の変化の経過を説明します。
最近では、1980年のアメリカのベトナム戦争敗北で中米が手を組み、その後、1989年にはベルリンの壁崩壊、1990年のドイツ再統一、ソ連崩壊とNATOの東方拡大などを経て、2009年からのオバマ大統領以降の8年間南シナ海問題などは後手になっているとの事でした。

メガトレンドとしては、4つの構造変化や世界の流れを変える6つの要素が考えられて、2016年には欧州は内向きになり、ロシアのプーチン、トルコのエルドガンなどの大統領達は行動予測がしにくく、特に中国、サウジアラビア、ブラジル、トルコなどが心配で、悩ましい年となってきています。

一方欧州は、難民問題、脆弱な治安・安全保障、政治的反動などにより苦しむことになり、そこに英国がEUを離脱したため、一層EUの将来に不確実性が増し、今後、EUが繁栄、治安などで役に立つことを示さなければ将来はないといわれています。従って欧州が武力紛争のない世界になったと考えるのは幻想であり、更に世界を平和にするか、戦争にするかを選ばなければならない 것입니다。

顧みてアジアを見てみると、ロシア・中国は国内の不安定や経済の弱さを隠すために力を誇示してみせており、一方アメリカは軍事力をちらつかせているといえます。この中国、ロシアの戦略と力とを、注意をもって対応しなければならないでしょう。その中で、日本はしっかりと防衛体制を整備し、領土保全、海洋安全保障をはじめ、情報収集をしなければいけません。そして日米同盟を更に強化させるべきであります。更に今後は、世界に依存するのではなく、世界の問題を自分の問題としてとらえ、日本の歴史、文化をしっかり確認して、世界に通用する能力を持つ人材を育てなければならないでしょう。そして自分の国は自分で守るとの決意を持ち、世界の安定化のための貢献を心がけ、海外の民主主義国としっかり連携して、世界の安定と繁栄に積極的に貢献する頼りがいのある誠実な国家にするのが日本の役割であり、使命であると考えます。(YW)

日本の使命

欧米と異なる文化的、歴史的背景を持ちながら、日本は植民地にならず伝統文化を維持しつつ議会制民主主義を導入し、発展。天然資源のない中で教育に力を入れ、科学技術を振興させ近代化を達成。

第二次大戦敗戦後、あらゆる困難を乗り越え、世界一の経済発展を遂げた。

非欧米の先進民主国家として、これまでの経験を活用し、今後ともODA、文化交流、経済交流などにより、民主主義と市場経済のルールに基づき国造り、人造りに取り組んでいる諸国に対し、協力を継続、強化し、更に積極的に世界の安定、繁栄、民主化のために努力を倍加すべきである。

世界の安定と繁栄に積極的に貢献する頼りがいのある誠実な国家、それが世界史における日本の役割であり、使命である。

講演会資料の抜粋

**

20年ごとの世界の変化

- 【100年予測】ジョージ・フリードマン著 早川書房より
1900年-ロンドン、世界の首都。欧州の支配。平和と繁栄
1920年-ロシア、オースマン、オーストリア、ハンガリーの各帝国の消滅
1940年-独が仏を占領。欧州を支配。ナチスとソ連の同盟
- 1960年-欧州は米ソによって分割。冷戦
1980年-米国、ベトナム戦争敗北。中米が手を組む。
2000年-1989年ベルリンの壁の崩壊と1989年ドイツ再統一
ソ連崩壊とNATOの東方拡大
2001年-9.11テロ
2014年-ロシアによるクリミア併合
2009-2017年-オバマ大統領時代
2020年- ?

今後の世界

1. 民主主義の価値観と独裁体制の価値観のせめぎ合いの世界
2. 日本は理念を明確に示して、法に基づく国際秩序を維持強化するため、国内体制を改革し、世界をリードしていくべし
3. イアン・ブレマー：「日本はどんな事があっても乗り越える力、resilienceのある国として世界が尊敬している。私も。」
4. ブルフ・ドイツ大統領：「日本の近代化は世界のモデルである。世界文化は日本のソフトな文化パワーなしで語れない」

田邊先生ご紹介の参考になる本(例)

- * 【何処へ行くのか、この国は】 村田良平著 (ミネルヴァ書房)
- * 【100年予測】 ジョージ・フリードマン、櫻井裕子著(早川書房)
- * 【新・100年予測 ヨーロッパ炎上】J・フリードマン、夏目大(同上)
- * 【ハーバードでいちばん人気の国・日本】佐藤知恵著(PHP)
- * 【司馬遼太郎が考えたこと エッセイ】司馬遼太郎著(新潮文庫)

【聴講者の感想】

* 「2013年28か国、約5億万人を擁する欧州連合を理解するには200年の歴史理解が必要である。忍耐と寛容の国フランスとヨーロッパのリーダーを自認するするドイツに最も注目をすべきである。英國のEU離脱は移民・難民、貧富の格差を取り残されたと感じる人々の不安が原因で、EUは繁栄、治安などで役立つことを示していかなければ将来は危い。このような世界情勢の中で、日本は欧米と異なる文化的、歴史的背景を持ちながら、植民地にならず伝統文化を維持しつつ議会制民主主義を導入し、発展し、天然資源がないにもかかわらず、教育に力を入れ、科学技術を振興させ近代化を達成した。世界の安定と繁栄に積極的に貢献する頼りがいのある誠実な国家、それが世界史における日本の役割であり、使命である。」 上方が講演の中で心に残るご指摘でした。(TIFA会員 女性KO)

* 昨年も同じ時期に「不安定化・複雑化する世界と日本の対応」と題してご講演いただきましたが、それ以降にイギリスのEU離脱や、アメリカ大統領選挙もあり、激動の世界を勉強するには最適のタイミングですね。湾岸戦争やベルリンの壁崩壊の現場に居られた方から、直接お話しをお聞きできるのは本当に貴重な機会です。
田邊先生が考えられる日本の課題は、漫画やアニメなどのコンテンツもいいですが、日本という素晴らしい国をもっと海外にアピールすることが必要で、例えばアメリカのCNNのように、ずっとニュースを流し続けているチャネルが日本にあってよいのでは?とのこと。北朝鮮という国が発する情報の良し悪しは別にして、日本と比べると北朝鮮の方が、確かに自国のスタンスは明確に示していますね。(TIFA会員 男性JT)

* 興味深いお話しを有難うございました。世界情勢を理解するには歴史的な背景、地域的な視点等多様な情報を得て、かみ砕き消化することが大事だと感じました。混迷する激動の世界情勢の中で、日本の使命を自覚すること、哲学の重要性が要求されていく時代をいよいよ迎えることを教えて頂きました。今の世界情勢の中、日本はしっかりと、ぶれない思いで長期的に泳いでいかないと、國家、国民の将来は無い様に思いました。また、歴史の証言者として、重要な立場でご活躍されたお話を興味深く拝聴させて頂きました。(TIFA会員 男性NG)

講演を聞いて-TIFAの進む道？

2017年は、大きく世界秩序が激しく変動する年になる。国際情勢を正しく把握し、日本の対応を一人一人が考えなければならない。国際理解セミナーを通して、絶えず学習する心構えが大事になる。外交官として豊富な大使経験を持つ講師から、広く世界情勢の解り易く丁寧な解説を受ける事により、私たちの進むべき道を探って行かなければならないと思う。そしてTIFAの活動が正しい方向に向かうことを願っている。(YY)



～ 変わりゆく欧州 現場からの報告 ～

2017年、激動の年が明けました。新任のトランプ大統領は就任後、矢継ぎばやに大統領令に署名して、「シリアやイラクなど、7か国の入国や難民受け入れを一時的に停止する」よう命じました。これに対し、国内外で抗議の声があがっています。移民で成り立っているそんな国が、今正面から試されています。一方イギリスは、EU離脱を選択しました。「国」単位でEUから離脱した例はありません、まさに未知の領域に踏み出すことになります。世界は混沌として来ています。そんな中、私達はどのような道を歩むのでしょうか。まさに日本の対応が求められています。

そこで私たちTIFAは、一昨年から国際情勢の勉強を始めました。田邊隆一先生の豊富な大使経験を生かして、国際情勢を分析し、解り易く丁寧に解説される国際理解セミナー(2、3頁参照)です。今年はヨーロッパの状況を踏まえて、世界秩序の崩壊と日本の対応でした。まずTIFAにかかる身近な人たちからの報告をお届けしましょう。(FK)

最近の欧州危機事情

イアン J. ポール

Europe という呼び名

Europe という呼び名のいわれは明らかではありませんが一説によるとフェニキア語で日没を意味する *ereb* から来ているそうです。ラテン語の *occidens* (日没) から来た *Occident* やサンスクリット語の *vas-atि*(夜) から来た *West* と類語になります。広大な大地の彼方にある、日出する国、日本の対極にあります。そして過去 7 年の間に EU は自身の日没を見たのです。

2009 年から 2013 年まで、ギリシャ、ポルトガル、アイルランド、スペイン、キプロスが深刻な財務危機を経験しました。これらの国は税収で財務支出を賄うことができず、必要なお金を借り入れることもできませんでした。私は幸いにも ESM (欧州安定化メカニズム) の設立に携わりました。

ESM はこれらの国々に緊急融資の仕組みを作るために設立されたものです。その融資で危機的な国々が何とか安定性を取り戻し、国家財政の立て直しの長い道のりにつくことが出来ました。

財政危機の原因は何だったのでしょうか

最も単純な説明は、1999 年のユーロ通貨の導入にあったというのですが、実は危機の最初から終わりまでユーロの価値は驚くほど安定していました。より正確には、危機の原因はユーロシステム内部の仕組みにあります。

公式的にはユーロ圏の各国が財務危機に瀕した時に何らかの支援をするという約束はありません。したがって、各国は自分の責任で税金を上げたり経済改革をしたり、最終的にはユーロ圏(そして EU そのもの)を去るということになります。

しかし、参加国がユーロ圏を去るという想定は重大な不安定感と、政治的な失策感を引き起します。このため、参加国と市場は実際的な脱出口を期待することになります。この期待が正しい考え方だという結論に至るには何年もの時間がかかりました。その間に参加国の中に深い溝が生じ、政治的不満がヨーロッパ全域に広がりました。結論は余剰のある国から債務過剰の国に対してお金を貸すということでした。貸与は譲与ではありませんが、金利は補助されることになりました。この仕組みが利益供与なのか長期的投資なのかは個人によって見

解が異なるでしょう。

二重の危機に見舞われた EU

2015-2016 年、ユーロ危機が「安定的危機状態」に収束し始めたばかりの時、EU は更に二重の危機に見舞われました。英国脱退と移民危機です。

英国の EU 脱退の国民投票は 20 年近くに及ぶ運動の結果でした。これは「反対運動」であって、離脱派は EU 脱退を望むということで一致していたわけで、脱退の理由について一致していたわけでも脱退後の政策について一致していたわけでもありません。彼らを結びつけていたものは実は移民への反対感情でした。同じ感情は欧州大陸の多くの国民の間でも共有されています。

移民はどうしてそんなに扱いにくい問題なのでしょうか？

EU は物資、事業、資本、および人の 4 つの基本的自由で成り立っています。労働力が失業のある場所から求人のある場所へ移動するという考え方は経済的な合理性があり、EU 設立以来の基礎でした。

しかし、労働者は物ではありません。彼らは働く場所の地域生活に混ざり合い、地域生活に同化するか、搅乱するかです。地域とは民主的政治力の基盤を生むところです。物資や事業や資本とは異なり、外国の労働者は自国の労働者と競合するだけではなく、地域の隣人でありママ友であり買い物で出会い、バスや電車と一緒に乗り合わせる人達なのです。外国人労働者は我々の日常生活の一部なのです。このように混ざり合った状態では彼らが様々な場面で地域住民を悩ますであろうことは容易に想像できます。善意に満ちた外国人であっても地域の通常の言動からはずれて、気になつたり心配の種になることが有りがちでしょう。

英國脱退と移民忌避の気運は解決できるでしょうか？

英國と他のヨーロッパ諸国との経済関係を構築するのは、労働者の移動を制限しよ

うという英國の主張を除けば至極簡単なはずです。考えられるひとつの解決方法は EU の労働者が英国内に必要な労働者がいない場合にのみ英國で職を求められるということかも知れません。

しかし、そのような妥協は EU 予算の分担のような英國からの見返りを伴うでしょう。同様の方策はスイスと議論されています。欧州大陸内部でも広がっている移民忌避の気運はシリアでの戦争や中東での政治不安によってもたらされた避難民の急激な流入が引き金になっています。これほど多くの外国人は脅威的な問題です。これら不幸な人々が何年ものあいだキャンプ地でじっとしているのでない限り、基本的には融合社会と複合社会のふたつの道筋があります。

スープ鍋とサラダ鉢

アメリカやフランスのように昔から融合社会であったところでは「スープ鍋」すなわち、外来者を溶け合わせた型を個々人に浸透させるということに力点が置かれます。

他方、複合社会、「サラダ鉢」の例はシンガポール、マレーシア、カナダで見られます。そこでは異なる人種が混ざり合いますがほとんど合体することはありません。植民地時代のシンガポールではヨーロッパ人、中国人、インド人、マレー人、等々が別々に生活を営み別々に働き、別々の一角落に住み、それぞれの社会構造や指導者や代弁者を持っていました。

今日のヨーロッパではスープ鍋とサラダ鉢が不完全な姿で存在しています。いわばどちらとも決めかねた煮サラダ状態です。

ヨーロッパでは陽が沈みかけているかもしれませんのが、再び陽の目を見なければ移民忌避政策にはまってはいけません。ヨーロッパはスープかサラダかの選択をしなければならないのです。(訳 加藤啓子)

Ian J. Pohl 弁護士 EU 職員

マーストリヒト大学で法律の講義も行っている。宝塚で育ったシズカ(静)と結婚。ルクセンブルク在住。

Europe's latest crisis

The origin of the word "Europe" is unclear but according to one theory it derives from "ereb", a Phoenician word meaning "sunset". This meaning is similar to its synonyms "Occident" (from "occidens" i.e. "sunset" in Latin) and "West" (of Germanic origin derived from "vas-at" i.e. "night" in Sanskrit). All these words convey the idea of a place where the sun sets, the etymological antipode of Japan at the other end of the enormous land mass that separate these parts of the world. For the last seven years European Union has experienced its own sunset. Between 2009 and 2013 many European countries, notably Greece, Portugal, Ireland, Spain and Cyprus, experienced a severe financial crisis. These countries were unable to pay their expenses out of tax revenue and could not borrow the money needed. They were facing bankruptcy, government shutdown, unemployment and social and political chaos. I was fortunate to work on the creation of the European Stability Mechanism, the organization that was set up to arrange emergency loans to these countries. These loans managed to restore stability and allow these countries to begin the long process of reforming their state finances.

What was the cause of the euro crisis? The simplest explanation is the crisis was caused by the introduction of the euro in 1999. This is an oversimplification, however. During the entire crisis the value of the euro remained surprisingly stable. More precisely, the cause was to be found in the inner workings of the currency system, some crucial details of which had been left somewhat ambiguous. Officially, no help was promised if a Eurozone member faced financial crisis. It would be that member's own responsibility to get its economy in order by raising taxes or reform its economy or ultimately to leave the Eurozone (and the EU). However, the prospect of a member leaving the Eurozone created great uncertainty and threatened political embarrassment. This led Eurozone members and markets to expect some kind of bailout in practice. This expectation was in the end that conclusion and the process opened up created massive political dissatisfaction across to lend money to the "deficit" countries. These Whether this represents a gift or a long term As the euro crisis just began to settle down again been hit by a double crisis: Brexit and the EU is the result of almost two decades of Brexiteers agree on wanting to leave the EU, policy should be pursued by Britain post-Brexit. The "glue" that kept the movement together, however, was anti-immigration sentiment. That same sentiment is shared by large sections of continental European populations as well.



proven to be correct. But it took years to arrive at deep rifts between Eurozone members and Europe. The solution was for the "surplus" countries loans were not gifts, but the interest was subsidized. investment is a matter of personal opinion. into a "stable crisis mode" in 2015-16, the EU has immigration crisis. The British referendum to leave campaigning. This is an "anti" movement. The but not on the reasons for leaving and what kind of

Why is immigration so sensitive? The EU is built on four fundamental freedoms: free movement of goods, services, capital and people. The idea that workers should move from places where there is unemployment to places where labor is in demand makes economic sense and is a cornerstone of the EU since its foundation. However, workers are not like commodities. They blend into the society of the place they work. They either integrate into that society or intrude on it. Society is the source of collective identity and the "demos", the basis of democratic political power. This means that, unlike foreign goods, services and capital that compete alongside domestic goods, services and capital, foreign workers will not only compete with domestic workers, but will also be neighbors, parents, consumers and fellow travellers on buses and trains, for example. In the words of German philosopher Jürgen Habermas, foreign workers become part of our "lifeworld". By blending like this, it does not require a lot of imagination to appreciate the many ways foreigners can give rise to annoyance among the local inhabitants. Even well meaning foreigners are likely to ignore linguistic and behavioral norms and generate attention and caution.

Can these latest problems of Brexit and anti-immigration feeling be solved? Establishing economic ties between Britain and the rest of the EU should be very simple except for Britain's insistence of curbing free movement of workers. One possible solution could be that EU workers would be allowed to compete for jobs only if no local workers were available. However, such a compromise would require something from Britain, such as payment into the EU budget. Something similar is being discussed with Switzerland. As for the spread of anti-immigration feeling in continental Europe the main trigger has been the sharp influx of refugees triggered by the war in Syria and political unrest in other parts of the Middle East. Handling such masses of foreigners is a daunting task. Unless these unfortunate people should languish in camps for years, there are essentially two paths: an integral society or a plural society. In traditionally integral societies, such as the United States and France, the emphasis is on the 'melting pot'; integrating the foreigners and molding them into individual members of society. The purest examples of plural societies (or 'salad bowl' societies) are Singapore, Malaysia and Canada. Here the different races mix but (mostly) do not combine. In colonial Singapore, the Europeans, Chinese, Indians, Malays and others lived and worked separately in different quarters of town, each with its own societal structure, elite and spokespeople.

In Europe today there are incomplete elements of both melting pot and salad bowl.

A kind of undecided 'melted salad'. The sun may be setting on Europe, but if it wants the sun to rise again it had better not fall victim to anti-immigration policies. Europe has to choose its dish.

Ian J. Pohl is a lawyer, an EU official and lecturer of law who lives in Luxembourg and is married to Shizuka Pohl from Takarazuka. All opinions in this article are his own. (この寄稿はポール個人の意見です)

ドイツ在住民が語る、 難民(Fluechtlinge)と移民の問題 ラルフ・ベーベンロー

移民については、根本的に異なる問題です

初期の移民 1960年代はイタリアから、1970年代はスペインから、1980年代はトルコから来ました。1950年代から1970年代までは、アハード財務大臣による経済政策は、“Wirtschaftspolitik Erhard”でした。

つまり、ドイツ国内における労働者の不足から、積極的に外国人労働者を受け入れました。スペインとイタリアからの労働者は、定年退職後自国に帰り、ドイツでの年金を受け取りながら生活しました。一方、トルコからの人たちは帰国せず、自国から家族をドイツに呼び寄せ新しいコロニーを形成しています。2005年以降、EUは10ヶ国の新しい加盟国の拡大で、移民は東から西へ移動しました。

EU域内はモノ・カネ・ヒトが自由に移動できるようになった結果、ブルガリア、ルーマニア、そのほかの東欧圏の国々の人たちはより良い暮らしを求めて、ドイツに移動してきました。しかし、ドイツ人とのメンタリティー(考え方)の違いが顕著に表れてきました。その例として、ルーマニア人は一つ所に留まらず、色々な国に行きましたが、移動してきた人は、ドイツ人と比べて教育程度は低く、結果仕事は見つけにくく、犯罪に関わる人たちも輩出しました。

現在のドイツの課題

多くのトルコ人たちは、トルコ人だけのコロニーをつくりトルコ語を話し、自国での生活様式を変えてこなかつたため(ドイツ人の暮らしに同化しようとしてこなかつたため)ドイツ社会に統合されてきていません。移民の多くは、ドイツに住み、教育はドイツで受けているものの、ドイツ国籍を得てもなお、自分たちがドイツ人でもトルコ人でもないと感じています。

外国人の中央登録 Ausländer zentralregister (AZR)によると2015年12月31日までに登録された外国人は910万人いますが、ここに登録していない外国人が圧倒的に多いのです。その人たちの把握はむつかしいのです。

2015年以降 シリアと他の発展途上国からの難民が急増します。2015年にはドイツにおける難民は200万人となりました。一方86万人のドイツ人が移住しています。2015年現在のドイツにおける難民の数は、歴史的にこれまでで最高です。

ドイツの難民受け入れとハンガリーの反対

2015年8月、7000人の難民がハンガリーに滞在し、メ

ルケル首相は彼らをドイツに迎え入れました。このできごとは世界中に知れ渡ることとなり、多くのまずい難民たちをドイツに向かわせる結果となりました。(ハンガリーでは足踏み状態です)その理由としては、戦争から逃れる、仕事を得る、子供たちのためにも良い生活がしたい、などです。

ドイツにとっての難民受け入れのメリットとデメリット

デメリットは、難民はドイツ人と働き方が違い、ドイツ人にとっては統合のコストが高くなる。教育程度が低いため、仕事が得にくく、結果まずい生活になることが多い。メリットは、若く意欲的な難民は経済のために役立つ。例として揚げたシリア人男性はBMWでインターナショナルをしています。

ヨーロッパの中での賛成と反対

多くの移民を受け入れた国々は、独、スウェーデン、ギリシャ、伊、その他です。ギリシャと伊では難民をドイツに押し返しました。難民の受け入れに反対している国々は、ハンガリー、ポーランド、仏、デンマーク、イスラエル等で理由は様々です。ハンガリーは、ジンギスカンの征服があった国で、フィンランド、スペインのバスク地方と言語にも共通点が見られて、特殊な地域性が存在しています。

ドイツの政治的な状況

メルケル首相(独キリスト教民主同盟CDU)の最初の主張は、我々には出来るでしたが、現在は独はドイツであり続けるに代わっています。ゼーホーファー氏(キリスト教社会同盟CSU)の主張は、独はドイツであり続けねばならない。

独人が貧しくなる確率はあまり高くないが、ドイツ人のアイデンティティは低くなる確率が高い。新しい選択肢である "Alternative fuer Deutschland" (AfD) は、(ドイツのための選択肢)という新しい政党が強くなってきています。現在の独人たちは、独に移住してコロニーを作っているトルコ人たちとは真逆に、独を抜け出して、独人がたいへん好むリゾート地、スペインのマヨルカ島では、スペイン人よりも独人の方が多くなり、独国内の様相を呈している、という例もあります。

日本は国としての方針や民意もあって、難民に対しお金は拠出しているかもしれないが、実際にはほとんど受け入れてきていません。ドイツ人、あるいは世界の難民受け入れ国的一般市民からは、どのように思われ受け止められているのでしょうか。

神戸大学経済経営研究所教授・ドイツ・カッセル大学卒、同大学院で博士号、主な研究内容は「国際経営」および「日本におけるヒト・モノ・カネ」

～多言語教育 それぞれの報告です～

生活風景のあちらこちらで外国人がかなり目立つようになった日本。いまや、世界各地において多言語社会がどんどん進んでいます。多言語社会では子どもたちの教育は、どこに向かえばいいのでしょうか。機関紙44号では、多言語子育て真っただ中の家族を多く取り上げました。今号では、奮闘真っ只なかの子どもたちと親たちの切実な生の声をお伝えいたしましょう。たくさん揃った宝石のようなレポートの中で、何か参考になれば、そしてお役に立てることが一つでも見つかればと思っています。(FK)

トップバッターは 子どもたちの声です

多言語、多文化の環境に育って

大月トビアス



僕は大阪で生まれましたが、2歳になる少し前から17歳の現在まで、オーストリアのウィーンで暮らしています。

父はドイツ人、母が日本人なので、ドイツと日本両方の国籍を持っています。

両親がオーストリア人ではなく、僕のように複数の国籍や母国語を持つのは、ウィーンでめずらしいことではありません。僕の場合、22歳までに国籍をどちらか一つに決めなければならないのですが、ヨーロッパでこれからも生活していくつもりなので、おそらくドイツ国籍を選ぶことになるだろうと考えています。

学校で、日本に関連したテーマになると、必ず質問され、説明を求められたりするので、皆から日本人だと思われているのを感じるのですが、僕自身は、協調性がなかったり頑固なところがとてもドイツ的だと思っています。

でも、故郷だと感じるのは育った国、オーストリアです。このように考えた時、自分のアイデンティティとも絡み、かなり屈折した感覚を覚えますが、多民族が共存する街ウィーンには、僕のような地球人とでもいいくべき人間が大勢います。

僕は今、ギムナジウムの8年生、日本でいう高校3年生です。これから半年の間に、卒業論文の提出とプレゼンテーション、卒業試験があります。オーストリアでは、大学に入学試験がないので、ギムナジウムの卒業資格試験に合格することが大学への切符となります。

ギムナジウムを卒業した後は、仕事を始め者、大学へ行く者、外国へ勉強に行くなど、進路は様々です。オーストリア人には兵役義務があるので、大学入学前に、兵役に付く予定のクラスメートもいます。

卒業後、大学へ行くのか、どこで何をするのか、僕はまだ何も決めていません。勉強する意味は何なのか、自分には何が向いているのだろうか、と自分自身に問い合わせながら、自分探しを続ける毎日です。

様々な言葉が耳に飛び込んでくる街、多くの人種と宗教が混在する街、で育った経験と、2つの母国語の他に複数の言語を話せる能力を活かして、多様な文化を理解し、広い目で世界を見られる人間になることが、僕の最終的な目標です。

(母親さやかによる日本語訳)

中国で働く上で大きなスキル

ハン

私は6歳から22歳までの16年間日本で生活していました。小中高大学卒業まで日本で教育を受け、育ったのですが、日本の学校で教わってきたことは間違いない、今中国で働く上で中国人より勝る能力・スキルとなっています。

日本で受けた教育及び長い日本生活で、私は謙虚さ、忍耐力、努力、自立性を教わり、身に付くことができました。小学校で人としての謙虚さ、中・高校で忍耐力、努力、そして大学では、自立することの大切さを学び、中国でのキャリアでとてもプラスとなり、現地にはない人材として、認められています。

現在、日本の旅行会社の北京支社で働いていますが、今後、自分の教育背景を活かして、ローカル社員にはないセンスや思考で、新しいビジネスチャンスを見つけて貢献していきたいと思っています。

また、将来自分の子どもにも日本で教育を受けてほしいと思っています。

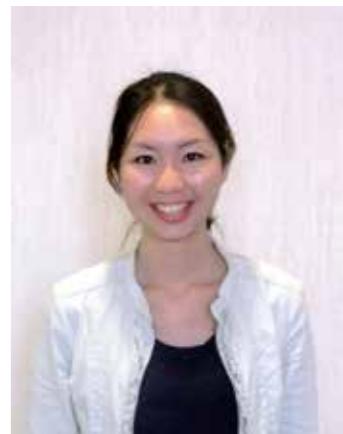
元気に伸び伸び、そして時には厳しく！これが日本の学校教育のすばらしいところだと思っています。

安全な日本社会

高山ワンヤダー

はじめまして高山ワンヤダーと申します。タイから来日して来月で丸10年になります。初めて来日し宝塚市役所に行った時の感動は今でも忘れられません。ちょうど紅葉がきれいな時期でした。日本に来てよかったと思う事は本当に安全な国だという事です。

先月タイに一時帰国しましたが、車優先の社会で本当に危険でした。小学校の送り迎えも親が必ず付き添います。日本で子ども達だけで登下校しているのを見ると、本当に安全な国だと実感させられます。子どもの医療費もほとんど負担がなく、すばらしい国だと思っています。



一方日本で困ったと思う事は、子育てに関して協力者が少ない事です。タイでは親戚や近所の人が子どもの面倒を看てくれるのが一般的です。近所の方に子どもを預ける際、まったく遠慮はいらない社会ですが、日本ではいろいろと気を使ってしまいます。私の子どもは日・タイのハーフなので、両国のよい所を学んで成長していってほしいと考えています。

ブラジルをまだ知らない私

セゼ カテリン ハルミ



私の名前は、セゼ カテリン ハルミです。阪神昆陽高校の2年生です。私は、ブラジルのサンパウロで生まれ、生後5ヶ月で日本にきました。日本に来てから、4歳まで日本人と関わらず生活していました。5歳になり保育園に入りました。その時私は当然日本語が話せませんでした。日本人の友達とコミュニケーションがとれなくとても困りました。

それで日本語を覚えるために、日本のテレビを見たり、日本人の友達とたくさん話をし

たり、毎日宿題をしました。それから1年が経ち、私は日本語を話せるようになります。ひらがなやカタカナも書けるようになりました。小学校入学し漢字も勉強しました。その頃の私は日本語は面白くない、難しいと思っていました。しかし、今となってはたしかに難しいし大変だと思います。その反面、日本語を勉強してよかったです。日本語は面白いと思います。

現在私は高校に通いながらアルバイトをし、週に1度ジョイアでポルトガル語を勉強しています。私は生まれてからずっと日本にいるのであまりブラジルの文化や歴史、ポルトガル語文法などわかりません。だからジョイアにいって勉強しています。

言葉の壁がつらかった

斎藤 ルカス アキヨ

僕の名前は斎藤ルカス アキヨです。年令は16歳です。



学校は、最初は良元幼稚園で、次に良元小学校で、その次に宝塚市立宝塚第一中学校に行って、今ではJRの尼崎駅から徒歩10分のところにある尼崎工業高校に通っています。家から学校までの時間

は約1時間です。国籍はブラジル国籍です。今までの日常生活や学校生活で楽しかったこと、苦しかったことがいろいろあります。まず学校生活のことです。それは言葉が分からなくて、いじられているっぽかだったので、ぼくはそれがいやで、どう話せばいいかわか

日本の在留外国人ベストテン

平成27年末の在留外国人数は、223万2,189人で前年末に比べて11万358人(5.2%)増加しています。一番多い国は、中国の約76万人、次に2位韓国の67万人です。いずれも構成比は20%を超えており、中国が1.7%増えているのに対し、韓国と4位ブラジル17万人、9位ペルー4万人は減っています。3位フィリピン23万人、5位ベトナム15万人、6位ネパール5.1万人、7位米国5万人、8位台湾、10位タイは増えています。

らず、相手をかみました。それが苦しかったです。嬉しかったことは、言葉が分かるようになります。たくさんの友達を作れるようになったことです。今は高校で将来のために一生懸命勉強しています。

孫娘のエレナちゃん12歳



祖母 赤坂倫代

父はイタリア人、母は日本人です。ボローニャの病院で誕生して、イタリアの大家族の中で成長。5歳くらいまでほとんど日本語は話さなかった。しかし妹が誕生し、家で母娘で日本語を話すようになる。年に数ヶ月、日本の祖父母とも話す機会もあり、習得が早くなつたように思う。

それに加えて、ボローニャ大学のアジア文化研究所での日本語の補習校へ週1回、3時間の授業に通い、現在、日本の教科書で妹がいっしょに学習している。補習校へは6歳から通っていて、時間もあるし、日本語も勉強できるのでとてもよい。日本語がわかって、TV番組、映画、アニメ、本など文化がわかって楽しい

イタリアの学校では友達とけんかした時、日本語で言うとわからないから便利。いじめられたりしない。ユーモアのある人といふると楽しい。クラスのゴシップ話はきらい。英語やドイツ語などの勉強も楽しいので、将来は、研究者、翻訳者、通訳者などできたらいいなあと思う。

ただいま人生12年目の女の子の気持ちです。さて、これからどう変身するかおおいに楽しみです。

日本語を始めたとき、最初は言葉が分からなくて、何を言おうか迷っていました。でも、徐々に慣れてきて、自分なりの表現ができるようになりました。特に、日本文化や習慣について学ぶのが好きです。例えば、お祭りや伝統行事など、日本の文化を体験できる機会があれば、必ず参加します。

親御さんたちの立場から 教育方針はどうでしょうか

多文化の中で暮らすこと 家族の意見をまとめると

プリンツ一家



右端の父マインハルト氏はウイーン大学ピアノ科教授・母中田留美子さんは二期会ソプラノ 左端のご子息シモンさんはピオラ奏者 宝塚姉妹都市ウイーン市在住 音楽一家

て良かったと言っていますが、丁寧語や男女それぞれの表現の違い等、日本語独特の複雑さには特に苦労しているようです。

それでも私達音楽家の場合は、“音楽”というもう一つの世界共通の言葉で、日々語り続けられることを幸せに感じています。

一般に“言葉の壁”と言いますが、日本人にとってのそれはとりわけ高い様に感じます。最近は日本でも外国人は多くなったとは言え、欧米のように多国籍多民族社会が当たり前という現象ではまだまだないと思います。

私達の暮らすウイーンは東欧と西欧の真ん中に位置していますが、EU圏が出来てからは更に民族の共存状態を余儀なくされています。

学校や社会ではドイツ語が公用語ですが、家に帰ればトルコ語、クロアチア語、英語…とそれぞれの文化の中で生活している人は多く、最低でも3か国語位は出来ないと良い就職先がないとまで言われる現状です。

そう言う環境の中では、バイリンガルで子どもを育てることは親からの最高の贈り物と言われていて、幼い時の柔らかい言語能力は数か国語も同時に、自然に吸収出来ると聞いていました。

私も息子とは生まれた時から日本語のみで話し、主人はドイツ語で、3人で会話する時は、子どもは左右の耳から別の言葉を聞いて各々に対応するという形でした。

最低でも10年は続けないと残らないと聞いていましたが、子どもも母親がドイツ語でもわかるらしいと気付く年頃には、ドイツ語で話してきましたが、“日本語しかわからないのよ”と押し切ったり、学校の友達に日本語を話すのをからかわれたりして、人前では絶対使いたがらないという微妙な時期もありましたが、多言語に精通する素晴らしさを自覚出来る年令になるまでは、親も子も辛抱が必要でした。

一方主人は子どもの成長と共に日本語を学

混血児の子育てに挑戦！！

ラルフ・ベーベンロー

私は両親が異なる国出身の子どもを「混血児童」と呼びます。私の場合は父親がドイツ人で母親は日本人です。そして娘は今5歳です。父親はドイツ語で話します。娘はたとえ父親がドイツ語で話しかけても彼女の答えは日本語でかえってきます。その理由は娘は父親のドイツ語の意味は全部理解できているのですがドイツ語で答える能力に欠けているからです。

又、父親が日本語で話してもドイツ語で考えたり話したりしようとは思わないようです。それは会話をむずかしくしてしまいます。だけど、私達は朝の食卓でも、夕食の時でも大いに会話をたのしんでいます。

娘にとっては日本語がより親しみやすくドイツ語のかわりに日本語で話したいようです。私達両親は彼女を日本の幼稚園に入園させて、土曜日にドイツ語の学校に行かせています。なぜなら、

彼女には「日本の社会秩序」を理解してその良さを認めるべきと考えるからです。

もしも、私達が彼女をドイツの学校に送っていれば彼女の振る舞いは日本の社会にうまく適合でないと思います。私達は日本で生活し続けたいので、彼女にはドイツ語と英語だけでなく漢字の読み書きのみならず「日本の社会秩序」もよく理解してもらいたいのです。

私達は娘と楽しくすごしています。彼女に有望な将来を準備してあげたいと思っています。私達はよく旅行をします。毎年夏になる少なくとも6週間、ヨーロッパやアメリカで過ごします。娘はたいてい母親と過ごします。私は仕事がありますので…。

すると娘は外国で日本語をつかっているようです。去年の夏のことでした。お友達が一人できました。その時彼女は日本語だけより他の言語を話すことが大切だとわかったようでした。この感情が将来、他の言語を理解するだけではなく積極的に話せるようにと高まっていけばよいと願っています。

私は娘が英語とドイツ語を話せるように、そして日本ですばらしい人生を送ってくれると非常に樂観的に思っています。

日本は他のどの国よりも平和であり、生活程度も高く多くの素晴らしいものを提供してくれるからです。

(訳 森脇洋子)

ベーベーンロートファミリイ
父はドイツ人、母は日本人、日本
在住13年 ドイツにて



Challenges of having a Hybrid-Child

I call a hybrid child when the parents are from different countries. In this case, the father is German and the mother is Japanese, the daughter is 5 years old now.

Father talks in German, daughter responds in Japanese. If the father talks to the daughter in German, the response from the child (the answer) comes out in Japanese. The reason for this is that the daughter understands all what has been said (in German language by the father) but lacks ability to speak out in German. Also, my daughter understands that I do speak some Japanese and does not feel to have the burden to think and speak in German language.

That makes conversation not easy; however, we have fun in conversation and breakfast in the morning and normally dinner in the evening together.

In all, Japanese language is more familiar to our daughter and she prefers to speak it instead of German. We send our daughter to the Japanese Kindergarten and on Saturdays to the German school, to make her understanding better German language.

However, we do not send her to the German school because she should understand and appreciate the Japanese system. In case we would send her to German school, her behavior would not anymore fit to Japanese society. As we want to continue to life in Japan, our daughter has to understand German and English but also the Japanese system as well as Kanji, to read and to write

them.

We have a lot of fun with our daughter and we are hoping to prepare her for a promising future.

Also, we travel frequently. Every year at summer, we spend so far abroad for at least 6 weeks, mainly in Europe or in the USA. When being abroad, however, our daughter is normally together with my wife - and I work - therefore, our daughter also abroad speaks rather Japanese. Last summer she found a friend and understood that it is important to speak also other languages than solely Japanese. We hope that this feeling will improve in the next future, so that she not only understands other languages but also actively speaks them.

I am very optimistic that our daughter speaks English and German soon and that she has a great future in Japan. Japan offers many wonderful things other countries do not offer such as peace and a high standard of living.



金采映さん一家の 七・五・三

不自由を感じずに日常生活を過ごすようになりました。

そして子どもが生まれてから、この土地に住む限り、メイン言語を日本語として、国際言語である英語と二人の共通語である中国語を身につけさせようと、最後余力があれば、韓国語をという事を夫婦そろって考えていたのです。

しかし、1年、2年、3年…子育てをしているうちに、私が間違った日本語を使っていないか、外国人のママのせいで言葉の発達が遅れるのではないか、複数の言語でお話しすると子供が混同するのではないか…等々悩みと心配の日々でした。

【多分異国にて異言語で子育てしている親なら共感すると思います】

今、奮闘中の親御さん

国際結婚の大変さ

金采映

子育ての悩みは、どうしても同じ国のカップル同志とは異なってきます。

私は韓国生まれ育ちの韓国人、夫は生まれも育ちも日本人、しかし、私たちが出会った処は中国。

日本語が話せないまま結婚と同時に来日して半年くらいまで中国語で会話をしていましたが、妊娠と共に生まれる我が子を考えて、いち早く日本での生活に慣れる為に、それから日本語を勉強し、来日して1年以内に言葉の

私がいくら日本語、英語、中国語が話せても、私にとっては外国語ですし、母国語である韓国語並みに限りなく豊かに表現出来るわけでもないし、一日24時間ほとんどの時間を私と過ごす我が子に、外国語で話しかけるのも、他人みたいな距離を感じるようになります。心がモヤモヤしていました。

さらに、色々な事に興味を持つ好奇心旺盛な長女が4歳になつてから、様々な事に対して聞かれる事や、心の話など深い会話をする時、日本語では気持ちがうまく伝えられないという事がありました。

愛情形成に親子間の円満な意思疎通がとても大事なのに…今躊躇くと思春期など大きくなつた時は、コミュニケーションが難しくなるだろう！母の言葉、母国語、つまり、私の母国語韓国語で我が子と心深いお話をしたい！

娘が5歳の時（当時幼稚園の年中）、ママの国韓国で暮らさせたい、韓国語で話しあいたいという強い気持ちがこみ上げて、1年間韓国留学を決めました。幸い自分の年齢より2～3歳上の学習能力を持っている事と、いつも明るくて積極的な性格だから、日本ではまだ幼稚園の年中組でしたが、校長先生の許可をえて、韓国の小学校1年生に入学させました。1か月でハングルの読み書きが出来、2～3か月になると普通に会話が、その上に韓国的一般常識も身について、本当に韓国人と日本人二つのアイデンティティーが揃っていくような兆しが見えてきました！小さい内にバイリンガールだと、第2、第3の言語へのアプローチが容易なのか、韓国の小学校1、2年生には英語の授業が選択でしたが、自ら英語も受講したり、又、インターネットで中国語童謡を検索して中国の歌を歌ったりなど、やる気満々でした。私と主人は一つの外国語を勉強するのに、大分苦戦したのと大違い、子どもはそれを遊びのように楽しんでいるのです！

韓国で1年生を終えて、日本に戻つて来たら、残念ながら日本では飛び級制度がない為、年齢に応じて、幼稚園年長を経て、私立小学校に入学しました。

進学した小学校では、1年生からネイティブによる英語授業があり、これと並行して家では毎日朝食の時間とおやつの時間は英語を、そして週1回は英検対策として文法、読み書きをするなど楽しく学んでいます。又、中国語もその合間に割いて少しづつ取り組んでいます。勿論韓国語のチャンネルもちゃんと作っています。

普段基本的に娘、息子と私は韓国語で、そして、skypeを通じて韓国のお祖母さん、友達たちとお話しをしています。言語は他のお稽古とは違い、父母亲がネイティブスピーカーでなくても、親の積極的な参加が必要とされます。言葉は結局、コミュニケーションの問題だからです。

母語の存在が自己認識の基盤となりますので、2個以上の母語を持つ国際結婚の子女は、片方の母語を失わず両方の母語をちゃんと保つ事が大事だと思います。その上で外国語の能力が国際社会での活躍を可能にしている為、必要不可欠であります。

幼い時から多言語の環境に浸かっていると言語だけではなく、オープンマインドになってコミュニケーション能力も高まり、相手の文化、背景、気持ちなど相手の事を理解しようと、他者の立場になって考える、その心配りも育っていくようです。

一石二鳥、いや三鳥になるかも！私もこれからもっと頑張っていきたいと思います。

今度はお子さんの気持ち
もお聞きしたいですね

最後に90代現役、
バイリンガルを謳歌している
おばあちゃんのご紹介です

母は戦前帰国子女？！

石原美生子

94歳の母、岡本由紀子は、父親の海外勤務で香港生まれのアルゼンチンはブエノスアイレス育ち。当時の国籍は英國で、ジョージ6世戴冠式典参加記念ティーカップが今でも残っています。

往路はスエズ運河、帰路はパナマ運河を通過しての豪華客船旅は地球1周とも言え、それぞれ50日間をかけて、まるで異文化の横浜港についたのは昭和13年16歳の時、ハイソックスにベレー帽の女学生は、まさに帰国子女のはしりと言えるでしょう。

母は、国歌といえば君が代ではなくイギリス国歌を口ずさみ、国旗掲揚はスペイン語。私にとってのおふくろの味はお味噌汁でなくスープでした。イギリス人学校で勉強は英語、遊びはスペイン語、家では日本語を話し（日本の教科書を取り寄せていました）、日本帰国後は東京の学校で寄宿舎生活故、現在も標準語を話します。

我が家を訪れる外国人に、2か国語が話せる陽気な母は人気者、まさにおばあちゃん外交官。

母を見ていて思うのは、人の思想、教養は、言葉によるところが大きく、特に記憶に関しては脳年齢が左右するのではないか。というのも、母の小さかった姉妹達は英語もスペイン語もすっかり忘れて、むしろ敵国語として辛い思いが幼心に残っているようです。普通の主婦だった母ですが、きちんと会話ができる女性として、来日したアルゼンチン大統領夫人や大使夫人達のご案内相手を頼まれることもありましたが、そうした折、楽しいアルゼンチンのおしゃべりで話は弾みますが、日本の歴史や古典芸能をよく知らないこと、



人間形成される時期に、侘び寂びなどの実感がないことなど十分に日本を語ることはできなかったよう（そばで父が母に説明する）という笑い話も）

かと言ってラテン的とも言えず、戦前婦女子の日本教育も受けた常識的な日本の母です。

付け加えて、戦前のアルゼンチンは日本よりずっと経済大国で、日本から移民として移住し、現在は逆であることも興味深いことです。

経済人として、満州国王溥儀にも謁見したこともある祖父の日記からは、まだまだ発展途上国である戦前の、日本の世界における政治経済の位置が読みとれます。

その夫人としての祖母のアルバムからは、当時の駐在員の大変ながらも華やかな生活が伺えますが、またボランティアの姿が現在のTIFAと重なります。

インターナショナルバザーでは、着物を着て日本人形や写真を飾り、お寿司をふるまつて日本文化紹介をし、また在住日本人2世の子供達に日本語を教え、病院や行政との間に立ってお世話する姿は、まさに現在のTIFA生活相談だと思いました。

その母も、昨年までは原稿も書いておりましたが、もうそれも億劫になり、代稿としました。

国際交流協会 ともだち in 名取



TIFAと末永くお付き合いの続く支援活動

毎年のようにオーストラリアから訪れるア・カペラ公演名取市や宝塚市で開催されるア・カペラ公演マクラレン・温子さんが携わっているア・カペラ公演そのア・カペラ公演やホームステイなどでいつもお世話下さっている山田司郎氏が名取市長にご就任されました



今年もTIFAは名取市に支援金をお届けします。
名取市支援を10年間は（2020年まで）続けます